

ジリ島の八景を作り、追而鏤梓之積りに候、此島霧靄深く、時として咫尺不可辨ことも數日有之、魚類は夥しく、鱸は海面凡一里餘も充滿、海岸は舟底に當り、櫓械も支候程にて、時々手捕にもいたし、一網凡二三千本は入申候、メナシの鮭も同様に候、此等之事餘りに珍敷、曾參が口を不假ば、信を世人に取に不可足かと獨笑いたし候、又可喜は此國いまだ修驗浮屠不入がゆゑに、高山大川とも、皆神代渾沌之儘にて、至て清淨に、山奥の夷人は、白鬚髮木皮衣、實に仙家と同じく、大に俗氣を解脱候こそ幸甚と存候、扱同島アトイヤと申所は、エトロフ島へ之渡り口にて、松前より凡三百里、極暑は四十五度に有之候、順風相待、七月廿三日、一葉之夷舟無恙渡海いたし候、然るに此渡りは一望纔に六七里に不足候得共、荒沙之強は、三馬屋之沙に二倍も可致、逆浪の面に沸騰、凡一丈五六尺も水底へ溜り可申、十五六間を隔候友舟之帆も互に不相見程にて、尤草根木皮を以綴合候夷舟にて搔渡り、事馴れ候、夷人も毎々溺没之患有之由にて、何レも咒符を唱へ、必死に摺搔渡海いたし候、著岸之比は、汐風にて半面鬚髮皆如雪になり申候、是迄は荒沙の強に恐れ候が故に、日本人更に渡海無之、夷人も年に一度往來のみにて、開闢以來、此エトロフ島江日本人渡海候は不佞を合て僅四度に不過候、夫が故に彼島の夷人も、日本人を珍敷覺へ、見物に出候程に候、不佞も既に溺没之覺悟窮候事も度々有之、召具之者顔色皆青黒如鬼、或は帶を解き、或は衣を薄して游揚を謀り候得共、不佞固より水練無之、此荒沙一度覆舟候得者、とても無生理、たとへ死して骸を魯西亞外國に暴し候とも、我邦之香を殘し可申と、著籠を著して渡海いたし候、扱エトロフ島は、日本人一切渡海不致候故か、山海の様子も事變り、森然と物淋しく、其人物は夜國之人とも覺敷ごとくにて、大に口蝦夷と異候、尤アツシも無之、草を以衣を製し、又は犬熊皮鷲羽を著し候、鯨も多く、頭に牡蠣附候程之大なるが游ぎ戯れ候に、夷舟にて其背へ乗かけ、毒箭を以射申候、不佞も鏑を以突可申と致候程之事に候、魚類は夥敷、試に編を投れば、一餌凡八九尾を釣り、鱈ア